



景観まちづくり委員会
出堀 義夫

函館では、早大の明石明道先生の出身が函館であり関係で、ライトの帝国ホテルの実測調査の講義を拝聴させていただいた。ホテルの解体最中の隙間をぬっての実測だったので、早大の建築の学生による実測は相当の緊迫感の中でのことだったろう。明石先生は地元のデパート「棒二森屋」も設計していた。

*

大学でも最初の作図は小堀遠州の大徳寺孤篷庵 忘笠(ぼうせん)で卒業旅行で畳に座ることができたが、実測の機会はなかった。歴史講座にしながら、素直さが足りない当時の自分は卒業研究でも歴史的建造物の実測をテーマにすることは、避けて通り過ぎてきた。

実測は今でも業務で毎回行くがあるが、肝心な寸法をはかってなかったり何度も実測に行くことも多い。近年レーザー機器の利用など飛躍的に実測作業は楽になっているとはいえ、野帳から作図への試行錯誤を何度も重ねることになる。

*

亡くなる半年前、真夏の直射が激しい日にお庭と建物関係を実測していた西沢文隆さんに私が設計監理していた、小さな個人記念館を見ていただいた。ハギを植えた記念館の庭を見て量が不足と思ったのか、ハギを足したほうがいいと言われた。自分のポケットマネーからでとことわって。自腹でないと本物にはならないという意味が込められていた。帰り路、焼けるような路上にあった石を拾って、ジーンと小石を眺めて面白いと言われた。西沢文隆さんが日本の歴史建造物と周囲の実測調査に「物狂い」をしていたのを実感したのは、西沢さんが亡くなり数年後の実測図の展示会や中央美術公論社刊の実測記録の大型本を目の当たりにしてからであった。

「タイパ」の時代、時短が望まれる時代の空気に、「景観まちづくり」は経済原理に合わない行為なのかもしれない。ただし実測することは景観まちづくりの切り口のひとつである。



◀ 3月25日・東葛支部の見学会・桜が満開の後楽園

現場の近くにあったが、ゆっくり訪れたのは数年後の桜の開花の時期だった。その施工会社は今はない。

*

私の大学時代の建築史の越野武先生の研究でも函館が開港された関係で幕末からの文明開化時代の建築物も残り、その遺構研究は講座で取り上げられ因縁を感じる。